

## 知識基盤社会における大学の「第三の使命」の遂行

### —大学の多様化と機能別分化の文脈を踏まえて社会貢献を考えるための基礎的考察—

全 京 和

#### はじめに

大学は、それが置かれた社会・経済・環境といった外部からの影響を受けながら、その期待される役割・機能も時代とともに形作られてきた。本来、大学には基本的な特質として自主性・自律性があるとされており、学問を探究する機関として、ある程度、その独立性が認められている。この特質ゆえ大学は、時には「象牙の塔」と呼ばれ、現実社会との深い関わりを意識しないことへの批判や、その中で生まれた学問知の価値に対して疑問視する声も上がっていた。また、一部の人のみに許された高等教育が、徐々にユニバーサル・アクセスの時代を迎え、量的に拡大されていく中で、大学における教育・研究の目的・内容・組織のあり方なども変容を遂げ、高等教育機関の中核としての大学が果たすべき役割・機能が見直されていった。日本の大学進学率は2018年度には53.5%となり<sup>1)</sup>、毎年過去最高値を更新している。高等教育機関全体でいうと、進学率は81.5%にも及ぶ。このような大学の量的拡大や進学率の上昇は、入学者選抜方法の多様化などと相まって、学生間の学力の格差、学力の低下といった課題を生み出し、大学教育の質保証を問題視する声も上がるようになった。加えて、運営費交付金や補助金といった政府の財源から支払われる教育費の負担が増えるにつれ、その適切な使い道や配分方法などをめぐってもますます厳しい条件が付されるようになった。こうして大学は、期待されている役割・機能を十分果していることを外部に向けて明確に提示せねばならない状況に置かれることになったのである。

冒頭で述べた通り、大学に期待されている役割・機能は、外部からの影響を受けて時代とともに形成されてきたが、教育と研究の遂行という役割・機能は、いつの時代においても優先順位の高い「使命（ミッション）」として位置づけられてきた。社会の持続的で継続的な発展のためには、高度の技能や知識を習得した

多くの人材と、新しい知識・情報・技術の絶え間ない革新が前提条件として必要になるが、ここで重要な役割を果たしうる機関として大学のもつ教育・研究の役割・機能は、歴史を超えて期待されてきたのである。これらのいわば古典的な大学の使命に加えて、さらに大学には、それが位置づけられている環境に対する「社会的・経済的発展への貢献（いわゆる社会貢献）」という新しい役割・機能が期待されるようになる。勿論、教育・研究・社会貢献という大学の使命は、明確に線引きできるものではなく、相互に間接的・直接的に影響し合い、補完し合っている。また、従来、大学の社会貢献という使命は、優れた教育と研究を行った結果としての間接的な貢献に近い形で理解されていた。だが、産業・工業社会に次ぐ知識を基盤とする社会においては、知識が経済成長を左右する主要な原動力となり、そこで教育と研究を使命とする大学は、重要な資源（resource）として、その経済的重要性が高まっていく。こうして大学に対する社会の要求も変化し、その結果、大学の果たすべき社会的責任の範囲や定義も見直されていった。知識基盤社会における知識・情報・技術の価値が社会的権限の源泉になるにつれ、大学はますます社会的機関になっていく<sup>2)</sup>。これに付随する形で、大学の「第三の使命」（the third mission）としての社会への貢献の意味合いも変わっていくのである。日本においても、2005年の『我が国の高等教育の将来像（答申）』<sup>3)</sup>において、大学の「第三の使命」の重要性が指摘されている。そこでは、「知識基盤社会における高等教育は、国家戦略の上でも極めて重要」であり、特に、「高等教育の中核としての大学は、教育と研究といった本来的な使命の遂行」と同時に、その期待される役割の変化を意識すること、また「直接的な社会貢献の役割」についても強調されている。

より社会的な側面を意識することが求められている（表1参照）現代の大学にとって、直接的な社会貢献はますます重要になるが、教育と研究という従来から

の役割・機能に比べて、社会貢献という「第三の使命」、特に「直接的」な貢献が何を指すのかは、漠然としている。また、高等教育の量的拡大や進学率上昇を背景に多様化している大学の実態を考えても、「大学」という概念を一括りに捉えて、その役割・機能を語ることは限界がある。大学の存在意義や価値の証明として、アカウントビリティを高めていくことが求められるが、その成果を測る準拠枠を設定するためにも、現状を的確に踏まえた概念の再吟味が必要になる。

表 1. 高等教育機関（大学）に期待されている役割・機能の変化

個人的で競争的な側面の重視	集合的で社会的な側面の重視
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 具体的な内容（コンテンツ）の重視</li> <li>・ 生産性向上のための一部の専門家の養成</li> <li>・ 労働市場のニーズに基づく方向性の設定</li> <li>・ 個人的属性や経済成長に基づく社会的利用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 具体的な内容、資質・能力、価値の重視</li> <li>・ 専門性を備えた市民レベルの人材育成</li> <li>・ 一つの集合体として社会のニーズに基づく方向性の設定</li> <li>・ 集合的利益や、社会の構築および、人と社会開発への貢献度に基づく社会的利用</li> </ul>

出典：Ecrigas（2008）<sup>4)</sup>より訳出。

本稿は、このような問題意識に基づき、大学の機能別分化の側面から「第三の使命」（社会貢献）を捉えて解釈するための分析枠組みについて検討することを目的とする。そこでまず、大学の「第三の使命」という概念について、先行研究の知見に依拠しながらその特質を明らかにし、類型化する。次に、大学の機能別分化について、日本における近年の動きに注目しながらこれからの大学に必要とされている役割・機能と、その方向性をさらに明確にする。最後に、社会へのコミットメントに対する大学の役割・機能に関する四つの学術モデルと、利害関係者の間の相互作用に関する螺旋モデル（helix model）について理解し、「第三の使命」の概念類型と大学の機能別分化の類型と合わせて、分析枠組みとしての適用可能性について考える。

なお、本稿では、地域やコミュニティを含む拡大された範囲（集団）として社会を捉え、社会貢献の中に、地域貢献やコミュニティへの貢献が含まれるものとして捉える。また、主として「社会貢献」という用語を用いるが、必要に応じて、「社会（地域）貢献」とい

うふうに併記する。

## I. 大学の「第三の使命」という概念

本節では、大学の「第三の使命」という概念が先行研究の中でどのように語られているのかを中心にみていき、そこから概念のもつ特徴を明らかにし、大きく三つの類型に分類する。

大学の社会貢献という「第三の使命」は、共通した定義があるというよりも、それが意味する内容が曖昧さを伴いながら、暗黙のうちに共有されてきたといっても過言ではない。社会とはどこまでを範囲とするのか、貢献とはどこまでのコミットメントを想定しているのか、大学が内部だけに留まらず、社会や地域といった外部へと開かれたものになるべきとする場合、その利害関係者はどこまでを対象とするのかなど、これらの定義次第で大学の「第三の使命」のもつ意味は大きく異なってくるのである。またそれが意味する中身は、時代や社会的状況といった文脈に依存しながら書き換えられる余地があることから、大学の社会的責任を語る上で、今の時代における大学の「第三の使命」の概念を吟味してみる必要がある。

ここからは、Lisman<sup>5)</sup>の議論を踏まえて、大学の「第三の使命」概念の類型を三つの視点から提示している Krčmářová<sup>6)</sup>の知見を援用しながら、複数の先行研究にみられる大学の「第三の使命」の概念的特徴をみていく。まず、一つ目の視点は、社会貢献を市場経済における高い競争力と労働力の供給であるとする経済的価値（側面）に根ざすものである。OECD<sup>7)</sup>は、この立場から「第三の使命」を捉えており、大学を、高度な専門的教育を受けた労働力を必要とする知識基盤社会における重要な経済的組織としてみなしている。他にも、この立場から「第三の使命」を捉えている学者らは「労働市場への敏感な対応」、「知的活動の商業化（commercialize）」、「大学のアントレプレナー的諸活動」、「ビジネス界への関わり」、「学生の就職率の向上」、「収入源拡大のための戦略」などの表現をその定義に含めている<sup>8)</sup>。

次に、二つ目の視点は、大学の「第三の使命」を、民主主義精神とその原則を維持させ、発展させていくことへの役割・機能といった、社会的価値（側面）に根ざすものである。この立場は、経済的色彩の強い「第

三の使命」とは別の観点から、「生活の質や社会の安定と発展」に焦点を当てて捉えること、また、「社会の諸問題にコミットし、その解決・改善を目指すことに貢献するアウトリーチ活動」として、さらに、経済や産業界を超えた地域社会に対する「社会的、経済的、環境的、文化的側面への関わりと能力向上（capacity building）」として、定義している<sup>9)</sup>。

最後に、三つ目の視点は、「イノベーション」というキーワードから大学の「第三の使命」を定義づけるものである。これは、イノベーションが単に技術革新だけを意味するのではなく、社会革新をも意味していることから、経済的価値（側面）と社会的価値（側面）の両方を含んだ視点を提供するものである。OECD<sup>10)</sup>の場合、イノベーションを語る際の前提として、「顧客、マーケティング、商業化、市場」といった用語が使われており、依然として経済的側面から捉えている。一方、社会革新という視点に重きを置いてイノベーションという概念を用いている立場は、社会の諸問題を解決することによって「人と地球の利益を追求」していくことが一つの大きなモチベーションであるとしている。ただ、そのイノベーションをビジネスモデルにつなげるといった、いわば「ソーシャル・アントレプレナー精神」（social entrepreneurship）についても言及されており、経済的な側面がまったく排除されているとは言えない<sup>11)</sup>。

ここまで先行研究における大学の「第三の使命」という概念の特徴を踏まえて、三つの類型に分類した（表2参照）。そこから、経済的側面やイノベーションという社会経済的側面に根ざした概念の捉え方には、OECDの見方が関与しており、社会的側面に根ざした類型よりも支配的な見方であったことや、社会的側面に根ざした概念類型にはその成果の可視化をめぐる他の類型に比べて難しい課題があり、近年、社会経済的な側面（社会革新としてのイノベーション）までを含んだ視点から議論されていることなどを理解することができた。

## Ⅱ. 大学の多様化と機能別分化と「第三の使命」

本節では、大学の機能別分化について、日本における近年の動きに注目しながら、これからの大学に必要とされている役割・機能と、その方向性を明確にする。

表2. 先行研究にみる大学の「第三の使命」概念の類型

類型	視点	特徴
第三の使命 = 市場経済における高い競争力と労働力の供給	経済的側面（経済主導）	労働市場への敏感な対応、知的活動の商業化、大学のアントレプレナー的諸活動、知的財産からの収入、充実した学習、学生の就職率の向上、収入源拡大のための戦略など
第三の使命 = 民主主義精神とその原則を維持させ、発展させていくこと	社会的側面（社会主導）	生活の質や社会の安定と発展、社会の諸問題へのコミットメント、その解決・改善を目指すことに貢献するアウトリーチ活動、地域社会に対する社会的、経済的、環境的、文化的側面への関わりと能力向上など
第三の使命 = 技術革新・社会革新と価値の創造	社会経済的側面	イノベーションをビジネスモデルにつなげるソーシャル・アントレプレナー精神など

出典：筆者作成。

日本では、2005年の『我が国の高等教育の将来像（答申）』において、今後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理の一つとして、「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」が掲げられ、機能別に分化された高等教育システムによる個性溢れる大学を構築することの重要性が指摘された<sup>12)</sup>。この答申では、大学が有する機能を「①世界的研究・教育拠点」、「②高度専門職業人養成」、「③幅広い職業人養成」、「④総合的教養教育」、「⑤特定の専門的分野（芸術、体育等）の教育・研究」、「⑥地域の生涯学習機会の拠点」、「⑦社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流等）」の七つに大別している。また、各大学は、上述の機能すべてではなく、一部のみを保有するのが通例であるとし、各大学の個性と特色を推進し、そこに限られた資源を集中的・効果的に投入しながら教育研究を充実させ・高度化を図ることが必要であるとの見解を示している。どの機能に比重を置くのかという判断は各大学に委ねられ、一定の機能に固定化されない緩やかな機能別分化を図り、大学全体としての多様性を確保していくことが2005年以降、目指されるようになった。

2005年の答申において提示された大学の役割に基づく機能別分化の議論をたたき台として、2017年12月の将来構想部会においては、三つの機能別分化の類型が提示された（表3参照）<sup>13)</sup>。そこでは、大学の活



動の次元を大きく「グローバル型」と「ローカル型」に分けており、「①世界的研究・教育の拠点となる大学」は、その活躍の舞台をグローバルな文脈に、また「③職業実践能力をもつ人材を養成する大学」は、ローカルの文脈に、そして「②高度な教養と専門性を備えた人材を養成する大学」は、主にローカルな文脈で活躍しつつ、グローバル型を目指していくことが示されている。

表 3. 大学の機能別分化の類型と特徴

活動の次元	機能別分化の類型	役割・機能
グローバル型	① 世界を牽引する人材の養成 (世界的研究・教育の拠点となる大学)	・世界に通用する学術研究・イノベーションの創出 ・国際交流・協力 ・俯瞰力や独創力を備えたグローバルエリート人材の輩出
	② 高度な教養と専門性を備えた先導的な人材の養成 (高度な教養と専門性を備えた人材を養成する大学)	・各分野を先導する研究 ・各専門分野における高い価値の創出を先導する人材養成
ローカル型	③ 具体的な職業やスキルを意識した高い実務能力を備えた人材の養成 (職業実践能力をもつ人材を養成する大学)	・特色ある地域の中核産業を支える専門人材の育成 ・地域密着型の産業や企業で働く人材に対する実践的な基礎能力教育や技能教育の重点的な実施 ・立地している地域の産業活性化や個別のニーズに対応できる高い実務能力を備えた人材の養成 ・立地している地域の課題など、個々のニーズに丁寧に応える研究活動の推進 ・地域の生涯学習・リカレント教育への貢献

出典：文部科学省（2018）『大学改革について』<sup>14)</sup>を参考に筆者作成。

大学の機能別分化の類型から読み取れる特徴としては、まず、類型①と類型②の大学の役割・機能として主に、教育と研究（第一・第二の使命）に、類型③の大学の役割・機能としては、教育と社会（地域）貢献（第一・第三の使命）に重きが置かれていることが挙げられる。また、「第三の使命」に関してさらに言うと、類型①の大学は、社会の範囲が国を超えた国際的なレ

ベルとして想定されており、教育と研究を通じた間接的な社会貢献として理解できる。一方、類型②の大学の場合、主に国全体というローカルな文脈を主な貢献の範囲とするが、同時にグローバルな文脈を意識して可能性に備えることも求められている。類型③の大学の場合、ローカルという意味がさらに限定され、大学が所在する地域として具体化されていることから、地域社会への直接的な貢献が強調されている。これは、地方創生に関する施策の一部として地方の（私立）大学を位置づけていることとも関連があると思われる。

最後に、第Ⅰ節でみた「第三の使命」を捉える三つの視点から言うと、これら①から③の類型は、経済的側面を意識しながらも、概ね社会経済的側面からの視点が反映されていると言えよう。

### Ⅲ. 大学の「第三の使命」に対する分析枠組みの検討

本節では、社会（地域）貢献における大学の役割・機能を捉える学術モデルと、利害関係者の間の相互作用を捉える螺旋モデル（helix model）を理解し、大学の機能別分化を踏まえた「第三の使命」を分析する枠組みとしての適用可能性について検討する。

#### 1. 大学と社会・地域の関わりを捉える学術モデル

大学の教育と研究という役割・機能に加えて、社会や地域への関わり方や役割を説明しようとする学術モデルとして、Entrepreneurial University Model、RIS University Model、Mode 2 University Model、Engaged University Model を取り上げ、以下にそれぞれについて説明する。

##### (1) Entrepreneurial University Model

Entrepreneurial University とは、起業家マインドで考え、行動し、起業家精神から資本を創出するためにリーダーシップを発揮する大学である<sup>15)</sup>。すなわち、イノベーションを通して価値を創造するアントレプレナーシップやそれに基づく思考・行動、組織のあり方を重視し、常に置かれた環境やその変化に敏感に反応し、対応する大学と言える。不確実性と複雑な諸問題に対処できる実用的な知識を生み出し、特定の問題の解決に貢献することで、経済的、社会的、文化的、技術的な価値を創造することを目的とする<sup>16)</sup>。

このモデルに基づくと、大学の「第三の使命」、特に経済的開発と関わる社会貢献は、教育と研究という大学の役割・機能を補完するものとして位置づけられ<sup>17)</sup>、大学は知識を商業化しようとする積極的な諸活動を通して、社会（地域）と密接に関連性をもつようになる。その結果、社会（地域）は、雇用創出、スピノフ（ビジネスアイデアの事業化）、知識の共有などといった波及（spillover）された形で、Entrepreneurial Universityを通してポジティブな効果を得ることができる<sup>18)</sup>。アメリカでは、ボトムアップの形で大学の起業化が進んできたのに対して、ヨーロッパでは、比較的近年になって、「学術的なアントレプレナーシップ」の現象が見られ、トップダウンの形でアメリカとのイノベーションギャップを是正するために議論されている<sup>19)</sup>。

## (2) Regional Innovation System (RIS) University Model

双方向のイノベーションプロセスにおいて大学の果たしうる基本的な役割を概念化したのが RIS University Model である<sup>20)</sup>。このモデルに基づくと、大学は、重要な知識の生産者であり、地域（社会）における知識のインフラとなる。その役割を担いつつ、その知識の生産プロセスに関わる他のアクターとの相互作用がどのようにして体系的なイノベーションへとつながるのかに焦点を当てるのがこのモデルである<sup>21)</sup>。

## (3) Mode 2 University Model

このモデルは、知識生産の様式の変化をモード1とモード2に類型化し、それが現代社会における科学技術活動の変容にいかに関わっているかについて明らかにしているが、そこで大学は、知識の生産様式において重要な役割を担っている<sup>22)</sup>。モード1（学術的、研究者主導、学問ベースの知識生産）においては、研究知の適用可能性への考慮より、科学的知識それ自体の解明を目指した研究やその結果としての知の生産が行われていた<sup>23)</sup>。それとは対照的にモード2においては、その特徴である特定の文脈に適応が可能な知識の生産（contextual applicability）や、学際的な問題解決の枠組み、多様なアクターが織りなす異質性（heterogeneity）などによって、社会から一歩離れて

いる大学から、社会の諸問題への解決に貢献する機関として、その役割・機能が捉え直される<sup>24)</sup>。

## (4) Engaged University Model

このモデルは、大学の役割・機能が社会・地域のニーズに適応することを理解するためのものである。大学のエンゲージメントの範囲は、知識を作り出すことに留まらず、継続的に地元の産業と社会に関わる中で、その知識の一部を証明する役割をも担うことになる<sup>25)</sup>。エンゲージメントの仕方もまた、経済的な諸活動に限定されず、地域に特化したプログラムの提供、地域のニーズを踏まえた地元学生への教育活動の調整・展開から、地域のネットワークを構築すること、政策的なアドバイスを行うことなどといったよりフォーマルな関わり方まで、広い範囲を含む<sup>26)</sup>。大学のエンゲージメントによって、政府レベルにおける政策アジェンダの見直しも行われ、当該社会が直面している課題や、研究対象としての地域の再考へとつながる<sup>27)</sup>。また、比較的設置されて間もない大学であり、都心から離れたところに立地する大学ほど、地域へのエンゲージメントに強くフォーカスする傾向にあることが研究から明らかになっている<sup>28)</sup>。

表 4. 大学の「第三の使命」を捉える視点と学術モデル

視点	学術モデル	特徴
経済的側面 （経済主導）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Entrepreneurial University Model</li> <li>・ RIS University Model</li> </ul>	<p>【共通】 地域開発の経済的側面に対する大学の貢献の強調（産業界との間の知識交換の重視）</p> <p>【相違】 商業化活動に焦点か、知識伝達のメカニズムへの焦点か</p>
社会文化的側面 （経済主導以外）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Mode 2 University Model</li> <li>・ Engaged University Model</li> </ul>	<p>【共通】 経済的側面を超えた社会的、文化的諸活動を考慮したより包括的な見解（社会の諸問題の解決への貢献）</p> <p>【相違】 知識創造レベルへの焦点か、それを超えた深い関与か</p>

出典：筆者作成。

ここまで、社会（地域）貢献に対する大学の役割・機能を捉える4つの学術モデルについてみてきたが、経済的な側面に焦点が置かれているのか、それを超えた側面を意識しているのかで区分し、まとめたものを表4に示した。Entrepreneurial University ModelとRIS University Modelは両方とも経済的側面に根ざして大学の「第三の使命」を理解しようとするものであるが、前者が、知識の商業化活動に重点を置くのに対して、後者の場合、知識の伝達メカニズムの側面を重視する。また、Mode 2 University ModelとEngaged University Modelは両方とも経済を超えた社会文化的側面に根ざすものであるが、前者が、知識が創造される次元に焦点を当てるのに対して、後者は、それ以上の関与の形態と様式までを分析の対象とする。

## 2. 利害関係者間の相互作用を捉える「螺旋モデル」

社会（地域）貢献に対する大学の役割・機能に関して、それに関わる利害関係者の間の相互作用を捉えようとするのが螺旋モデル（Helix Model）である<sup>29)</sup>。1990年代以降、産業界と政府が支配的な役割を果たしていた産業社会・工業社会における従来の関係性から、知識を作り出す一つの主体として大学までを含み、知識を基盤とする新しい社会における産学官の三重の関係への解釈が見られるようになった。知識社会におけるイノベーションは、大学に期待される役割・機能であることから、その積極的な意義を踏まえて、知の生産、移転のための新たな制度的フォーマットを生み出すための試みが始まったのである<sup>30)</sup>。

螺旋モデルは、螺旋の内側の核の部分と外側の場の空間から構成される。大学の場合、核となる教育と研

究という機能を、独自性をもって行うことができるが、同時に、社会・地域貢献として、外側の場で産業界などと相互作用する。このように、大学、産業界、政府のそれぞれの独自性を担保する核の部分と、相互作用し影響し合う外側の場の空間から三重の螺旋モデルが構成される<sup>32)</sup>。従来、この螺旋モデルは、産学官の相互作用を捉えるために、三重螺旋（The Triple Helix）モデルと呼ばれていたが、近年、市民社会までを含んだ四重螺旋（Quadruple Helix）が分析枠組みとして用いられることもある（図1参照）。

## 3. 分析枠組みの検討

日本における大学の機能別分化の議論から「グローバル型」と「ローカル型」という、大きく二つの大学が目指すべき方向性が提示され、それぞれの種類の大学がコミットする領域がより明確になった（図2参照）。共通して言えるのは、いずれの種類の大学も、外部への積極的な関わりが求められていることであるが、その外部の範囲や次元、関わり方については異なる戦略が必要となる。

本稿で取り上げた複数の学術モデルを大学の類型に当てはめて考えてみると、まず、「世界的研究・教育の拠点大学」には、イノベーションを通して価値や知的資本を創出するためにリーダーシップを発揮することが期待されていることから、Entrepreneurial modelを用いて、分析することが可能だと考える。加えて、螺旋モデルを用いて、当該活動に関わっているアクターの間の相互作用や知識の創生・伝達・商業化などのメカニズムの解明を目指すことができる。その場合、産業界、大学、政府、市民社会の構造で固定化されたものを想定するより、複数の産業界をまたがっ

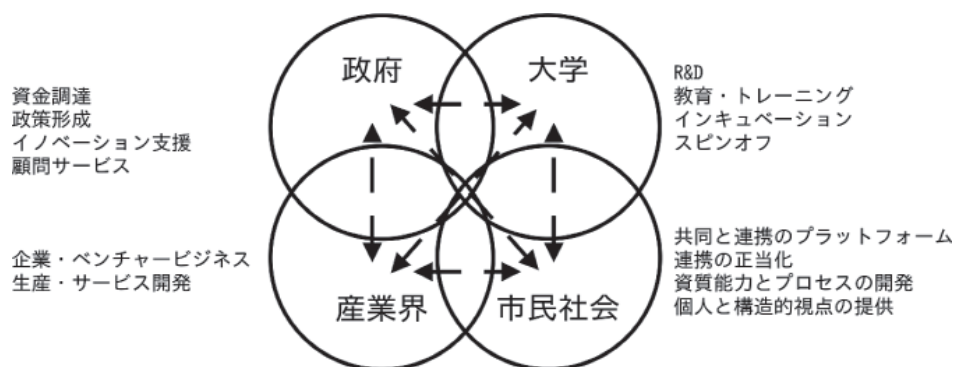


図1. 四重螺旋モデル（Quadruple Helix Model）の概念図

出典：Lindberg, et al. (2014)<sup>31)</sup>より一部修正し、訳出。



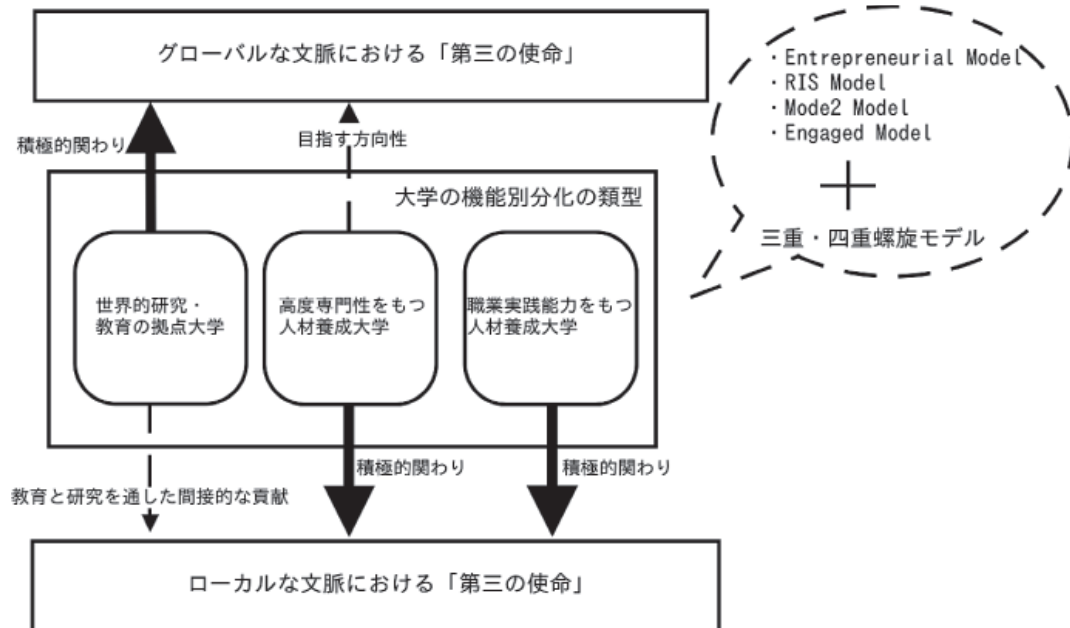


図2. 機能別に分化された大学の形と「第三の使命」を捉えるための分析枠組み  
出典：筆者作成。

た連携や、国境を超えた大学と外国の産業界、市民社会、政府といったグローバルな文脈とローカルな文脈の区分が明確でない状況における社会貢献も十分考えられることから、螺旋モデルの設定について柔軟に検討することが必要になる。

次に、「高度専門性をもつ人材養成大学」には、国を牽引する高度な人材の育成が託されていることから、Mode 2 modelを用いて、社会の競争力を高め、持続的な開発を可能にする高度な知識の生産と、国内における学際的で異質な集団から成る共同体の形態を理解することが可能だと考える。この場合にも、アクターの相互作用を捉える視点として螺旋モデルが適用可能であるように思われるが、このタイプの大学の場合、ローカル型という意味の中に全国と特定の地域という二つの市民社会が想定できることや、国内の複数の産業界との共同も十分考えられることから、前者同様に、螺旋モデルの設計について吟味する必要がある。

最後に、「職業実践能力をもつ人材養成大学」には、RIS modelとEngaged Modelから「第三の使命」をみていくことが可能だと考える。二つのモデルとも、特定の地域への強いコミットメントを説明しようとするものであるが、それを捉える視点が経済的な側面に根ざしているのか、それを超えているのかで違いがある。螺旋モデルを用いる際には、市民社会というアクターが、特定の地域というさらに限定されたものに

なっていることや、産業界を含まない取り組みもあり得ること、また、政府の代わりに地方自治体の行政というアクターが入ることや、さらには、都道府県と市町村の両方の行政がアクターとして入ることも予想されるため、前者同様に、モデルの設計について丁寧な検討が必要になる。また、このタイプの大学は、どちらかという教育の側面における貢献も期待されていることから、大学による知識の生産という側面を超えて、地方大学の教育機関としての新たな存在価値にまで範囲を広げて、事例に適用してみることも有効であると思われる。

## おわりに

本稿では、大学の機能別分化に関する議論が進んでいる現状を踏まえて、これからの時代における大学の「第三の使命」（社会貢献）を捉えて解釈するための分析枠組みについて検討することを目的とした。大学の「第三の使命」概念の類型化、機能別分化に沿った大学の類型と役割・機能の確認、そして大学の外部との相互作用を説明するための複数の学術モデルの検討を通して、その分析枠組みとしての適用可能性について考えてきた。その結果、特定の観点が強調された学術モデルを用いて分析することで、大学の類型のもつ特徴を一層明確に説明することが可能であること、また、

アクターの相互作用を捉える螺旋モデルを用いる際には、単純化された理論からは見えてこなかった状況までを想定し、柔軟かつ丁寧に設計を行う必要があることなどについて知見を得ることができた。

本稿で得られた暫定的な結論は、あくまでも理論上の議論を踏まえて導出されたものであり、この枠組みを用いて、実際、どれほど現状に対する説明ができるのかについては、実証的研究が不可欠である。また、日本における大学の機能別分化の類型も固定化されたものではなく、今後修正される可能性があることにも留意する必要がある。さらに、本稿で取り上げた学術モデルはいずれも欧米において議論され検討されてきたものであり、日本のローカルな文脈をどのように分析枠組みの設定や考察に組み込むのかについても丁寧に検討しなければならない。これらの点に注意を払い、事例分析を重ね、分析枠組みの検証と精密化を進めていきたい。

## 註

- 1) 『平成 30 年度学校基本調査（確定値）の公表について』（[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449_1.pdf)、最終閲覧：2019 年 9 月 15 日）
- 2) Krčmářová, J. (2011). The third mission of higher education institutions: conceptual framework and application in the Czech Republic. *European Journal of Higher Education*, 1 (4), 316p.
- 3) 中央教育審議会 (2005) 『我が国の高等教育の将来像（答申）』（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm)、最終閲覧：2019 年 9 月 15 日）
- 4) Ecrigas, C. (2008) Foreword in *Higher education in the world 3: Higher education: New challenges and emerging roles for human and social development*, eds. A.G. Roca et al., Hampshire: Palgrave Macmillan. xxxip.
- 5) Lisman, D.C. (1998) *Toward a civil society: Civic literacy and service learning*. Westport, CT and London: Greenwood. 23p.
- 6) Krčmářová, J. (2011) The third mission of higher education institutions: conceptual framework and application in the Czech Republic. *European Journal of Higher Education*, 1 (4), 317-319pp.
- 7) OECD (2007) *Higher education and regions: Globally competitive, locally engaged*. Paris: OECD Publications.
- 8) Molas-Gallart, J., A. Salter, P. Patel, A. Scott, & X. Duran. (2002) Measuring third stream activities: Final report to the Russell Group of Universities, *Science and Technology Policy Research unit. University of Sussex.*; Nelles, J., & T. Vorley. (2008) Constructing an entrepreneurial architecture: An emergent framework for studying the contemporary university beyond the entrepreneurial turn. *Innovative Higher Education* 35, no. 3: 161—176pp.; Guerrero, M., Cunningham, J.A., & Urbano, D. (2015) Economic impact of entrepreneurial universities' activities: An exploratory study of the United Kingdom. *Res. Policy*, 44, 748p.; Sánchez-Barrioluengo, M. (2014) Articulating the 'three-missions' in Spanish universities. *Res. Policy*, 43, 2p.; Pilbeam, C. (2006) Generating additional revenue streams in UK universities: An analysis of variation between disciplines and institutions. *J. High. Educ. Policy Manag.*, 28, 297p.; Watson, D. & Hall, L. (2015) Addressing the Elephant in the Room: Are Universities Committed to the Third Stream Agenda. *Int. J. Acad. Res. Manag.*, 4, 48p.
- 9) Wedgwood, M. (2003) Making engagement work in practice. In *The idea of engagement: Universities in society*, ed. S. Bjarnsson and P. Coldstream. London: Association of Commonwealth Universities.; Wedgwood, M. (2006) Mainstreaming the third stream. In *Beyond mass higher education: Building on expansion*, ed. I. McNay. Maidenhead: Open University Press., 139p.; Montesinos, P., J.M. Carot, J.-M. Martinez, & F. Mora. (2008) Third



- mission ranking for world class universities: Beyond teaching and research. *Higher Education in Europe* 33, no.2: 259-271pp.; B-HERT (2006) Business/Higher Education Round Table. Universities' Third Mission: Communities Engagement, *B-HERT Position Paper* Melbourne, Australia, 3-4pp.
- 10) OECD (2007) *op. cit.*
  - 11) Howaldt, J., & M. Schwarz (2010) Social innovation: Concepts, research fields and international trends, *IMO international monitoring*, ZWE.; Phills J.A. Jr., K. Deiglmeier, & D.T. Miller (2008) Rediscovering social innovation. *Stanford Social Innovation Review* 6, no. 4: 34-43pp.
  - 12) 中央教育審議会 (2005) 前掲文献; 中央教育審議会大学分科会第 73 回資料 2、2008 年 12 月 16 日 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08121809/002.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08121809/002.pdf)、最終閲覧: 2019 年 9 月 15 日)
  - 13) 中央教育審議会大学分科会第 139 回将来構想部会第 10 回合同会議、2017 年 12 月 15 日配布資料。
  - 14) 文部科学省『大学改革について』2018 年 5 月 16 日 (<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/jinsei/100nen/dai7/siryous3.pdf>、最終閲覧: 2019 年 9 月 15 日)
  - 15) Audretsch D. B. (2014) From the entrepreneurial university to the university for the entrepreneurial society, *The Journal of Technology Transfer*, 39 (3), 313-321pp.
  - 16) Peterka, O., & Salihovic, V. (2012). What is entrepreneurial university and why we need it?. Peterka.; Jameson, J., & O'Donnell, P. (2015) The Entrepreneurial University: a Unifying Theme for TU4Dublin Stream 1: *Enterprise and Engagement*. 6.
  - 17) Clark, B. (1998) *Creating Entrepreneurial Universities: Organizational Pathways of Transformation* (New York, NY: Elsevier); Etzkowitz, H. (1983) Entrepreneurial scientists and entrepreneurial universities in American academic science, *Minerva*, 21 (2), 198-233pp.; Etzkowitz, H. (2014) The second academic revolution: The rise of the entrepreneurial university and impetuses to firm formation, in: T. Allen & R. O'Shea (Eds) *Building Technology Transfer within Research Universities: An Entrepreneurial Approach*, 12-32pp. (Cambridge: Cambridge University Press).; Etzkowitz, H., Webster, A., Gebhardt, C. & Terra, B. (2000) The future of the university and the university of the future: Evolution of ivory tower to entrepreneurial paradigm, *Research Policy*, 29 (2), 313-330pp.
  - 18) Trippl, M., Sinozic, T., & Lawton Smith, H. (2015). The role of universities in regional development: conceptual models and policy institutions in the UK, Sweden and Austria. *European Planning Studies*, 23 (9), 3p.
  - 19) Frondizi, R., Fantauzzi, C., Colasanti, N., & Fiorani, G. (2019) The Evaluation of Universities' Third Mission and Intellectual Capital: Theoretical Analysis and Application to Italy. *Sustainability*, 11 (12), 8p.
  - 20) Asheim, B., Lawton Smith, H. & Oughton, C. (2011) Regional innovation systems: Theory, Empirics and policy, *Regional Studies*, 45 (7), 875-891pp.; Cooke, P. (1992) Regional innovation systems: Comparative regulation in the New Europe, *Geoforum*, 23 (3), 365-382pp.; Cooke, P., Heidenreich, M. & Braczyk, H-J. (Eds) (2004) *Regional Innovation Systems*, 2nd ed. (London: Routledge).
  - 21) Trippl, M., Sinozic, T., & Lawton Smith, H. (2015), *op. cit.*, 4-5p.
  - 22) Gibbons, M. (2013) Mode 1, Mode 2, and innovation, in: E. Carayannis (Ed.) *Encyclopedia of Creativity, Invention, Innovation, and Entrepreneurship*, 1285-1292pp.
  - 23) Trippl, M., Sinozic, T., & Lawton Smith, H. (2015), *op. cit.*, 5p.
  - 24) Nowotny, H., Scott, P. & Gibbons, M. (2001) *Re-Thinking Science: Knowledge and the Public*

- in an Age of Uncertainty* (Oxford: Polity Press).
- 25) Boyer, E. (1990) *Scholarship Reconsidered: The Priorities of the Professoriate* Princeton, NJ: *Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching.*; Universities UK (2010) *Making an impact: Higher Education and the English Regions.*; Gunasekara, C. (2006) Reframing the role of Universities in the development of regional innovation systems, *Journal of Technology Transfer*, 31 (1), 101–113pp.
  - 26) Trippl, M., Sinozic, T., & Lawton Smith, H. (2015), *op. cit.*, 6p.
  - 27) Arbo, P. & Benneworth, P. (2007) *Understanding the Regional Contribution of Higher Education Institutions: A Literature Review* (Paris: OECD).
  - 28) Boucher, G., Conway, C. & Van der Meer, E. (2003) Tiers of engagement by universities in their region's development, *Regional Studies*, 37 (9), 887–897pp.
  - 29) Etzkowitz, Henry (1998) The Endless Transition: A “Triple Heerix” of University-Industry-Government Relations, *Minerva*, 36, 203-208pp.
  - 30) Triple Helix Research Group, *The Triple Helix concept* ([https://triplehelix.stanford.edu/3helix\\_concept](https://triplehelix.stanford.edu/3helix_concept)、最終閲覧：2019年9月15日)
  - 31) Lindberg, M., Lindgren, M., & Packendorff, J. (2014) Quadruple Helix as a way to bridge the gender gap in entrepreneurship: the case of an innovation system project in the Baltic Sea region. *Journal of the Knowledge Economy*, 5 (1), 102p.
  - 32) 中田行彦 (2013) 「多層トリプルヘリックスモデルの提案」『日本ベンチャー学会誌』第21号、75頁.